

平成二十三年度冬季

全国大学国語国文学会 第一〇四回大会案内・要旨集

期日 十二月三日(土)・四日(日)

会場 大分大学

平成二十三年度冬季

会場 大分大学

全国大学国語国文学会 第一〇四回大会のご案内

〒870-1192 大分県大分市且野原七〇〇
電話 〇九七―五五四―七五三三（藤原耕作研究室）

○同封の葉書に出・欠をご記入の上、十一月二十一日（月）までに必ず着くようにご返送下さい。（ご欠席の場合も必ず出欠葉書をご返送下さい。）十二月三日（土）の常任委員・委員会の昼食代は振り込みにて承りますので、実費一、〇〇〇円をお振り込み下さい。

○十二月三日（土）の懇親会費（一般八、〇〇〇円、院生六、〇〇〇円）、レジュメ資料代（一、〇〇〇円）、十二月四日（日）の昼食代（一、〇〇〇円）は、同封の郵便振替用紙（口座番号 〇一七〇〇―二一七〇九八三 口座名称 平成23年度冬季大会）にてお振り込み下さい。

○出張依頼が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、本学会事務局へお申し出下さい。

全国大学国語国文学会事務局 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目十番二十八号

國學院大学文学部日本文学科一〇〇八研究室内

電話・FAX 〇三（五四六六）〇二一一

Eメール chensim1008@yahoo.co.jp

○本学会 本大会に関するご連絡は、右記本学会事務局もしくは左記会場校へお願いいたします。

会場校連絡先 大分大学教育福祉科学部学校教育課程教科教育コース国語選修 藤原 耕作 研究室

〒870-1192 大分県大分市且野原七〇〇
電話 〇九七―五五四―七五三三（藤原耕作研究室）

Eメール fujiwarakosaku@oita-u.ac.jp

《交通》大分駅から

【JR豊肥線】「大分大学前駅」下車（所要十五分）。徒歩一〇分。

【大分バス】「大分駅前」もしくは「トキハデパート前①のりば」より、「大南団地・高江ニュータウン」「大分大学」行きに乗車し、「大分大学正門」もしくは「大分大学（構内）」下車（所要三十分）。

第一日 十二月三日(土) 大分大学教育福祉科学部一〇〇号教室 受付(12時30分)

常任委員会(11時～11時30分)

地域交流室

常任委員・委員会(11時30分～12時)

第一会議室

開会式(13時～13時10分) 一〇〇号教室

開会の辞

総合司会／本学会常任委員・東洋大学教授

学会挨拶

本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

会場校挨拶

大分大学教育福祉科学部長

千艘 秋男
中西 進
柳井 智彦

公開シンポジウム(13時10分～17時30分)

テーマ「キリスト教と近代文学」

基調講演(13時10分～14時10分)

芥川龍之介(キリシタンもの)の水脈―「神々の微笑」を中心に― 九州大学教授

松本 常彦

〈休憩〉 第一会議室

パネルディスカッション(14時30分～17時30分)

パネリスト

山梨英和大学教授

フェリス女学院大学教授

大分大学専任講師

関西学院大学教授

川島 秀一
宮坂 覺
八木 直樹
細川 正義

懇親会(19時～21時)

会場 大分東洋ホテル

会費 一般 八、〇〇〇円、大学院生 六、〇〇〇円

※公開シンポジウム終了後、18時頃に送迎バスが出ます。

第二日 十二月四日(日) 受付 10時〜 大分大学教育福祉科学部教室棟二〇〇号教室前
研究発表会

〈午前の部〉(10時30分〜11時55分)

A会場(二〇〇号教室)

豊玉毗賣神話における「塞海坂返入」の意味

総合司会／本学会常任委員・宮城学院女子大学教授

犬飼 公之

発表者／國學院大學大学院生

室屋 幸恵

司会／同志社女子大学特任教授

寺川 眞知夫

平安前期における挽歌の位相

発表者／万葉古代学研究所

小倉久美子

司会／大東文化大学教授

藏中しのぶ

B会場(三〇〇号教室)

大江健三郎『水死』論——作家的課題への〈新しい挑戦〉

総合司会／本学会常任委員・中京大学教授

原 國人

発表者／日本女子大学学術研究員

鈴木 恵美

司会／天理大学専任講師

渡部 麻実

モダリティにみる主題のニハ文

発表者／熊本県立大学大学院生

佐澤 有紀

司会／滋賀短期大学教授

柿木 重宜

〈昼食・休憩〉(12時〜13時 二〇四号教室)

〈午後の部〉(13時〜14時25分)

A会場(二〇〇号教室)

ノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵 伝明融筆『源氏不審抄出』について

総合司会／本学会常任委員・宮城学院女子大学教授

犬飼 公之

発表者／ノートルダム清心女子大学大学院生

伊永 好見

司会／広島大学教授

妹尾 好信

牧水と万葉集

発表者／同志社女子大学研究生

田中 教子

司会／宮崎産業経営大学教授

大坪 利彦

B会場（三〇〇号教室）

本邦文献に見られる漢語受容の一形態

——「無心」の語史を通して——

総合司会／本学会常任委員・中京大学教授

原 國人

発表者／九州大学大学院生

張 愚

司会／広島女学院大学教授

柚木 靖史

魚名「しいら【鱈】」について

萩原 義雄

発表者／駒澤大学教授

柚木 靖史

閉会式（14時30分～15時 二〇〇号教室）

研究発表奨励賞授与

閉会の辞

本大会実行委員長／本学会常任委員・大分大学准教授

藤原 耕作

平成二十三年度冬季

全国大学国語国文学会第一〇四回大会 公開シンポジウム キリスト教と近代文学

《基調講演》

芥川龍之介〈キリシタンもの〉の水脈―「神々の微笑」を中心に―

松本 常彦

「西方の人」(「改造」昭和2(1927)年8月)の第一章「この人を見よ」は、「わたしは彼は十年ばかり前に芸術的にキリスト教を――殊にカトリック教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に残つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせっせと拾つてゐた鴉に過ぎない」という一節で始まる。「文藝雑談」(「文藝春秋」昭和2年1月)でも、「キリシタンの徒に詩的感情を寄せ」た「先輩」として「北原白秋氏や木下杢太郎氏」を数え、「僕などはそれらの先輩の造つた畝を歩いて行つた鴉である」と発言している。これらの自嘲的な発言からも、芥川のいわゆる「キリシタンもの」の水脈の一つが、白秋や杢太郎の文学にあることは明らかである。しかし、大正5年の「煙草」から昭和2年の「誘惑」に至る〈キリシタンもの〉の創作を考えるなら、この「鴉」は、明らかに、「先輩」たちより、その「種」に執着している。その執着が、白秋や杢太郎の異国情緒や南蛮趣味の反復でしかなかったなら、「西方の人」は書かれなかったであろう。白秋や杢太郎による「キリスト教」への「芸術的」開眼を言う一節が始まる「この人を見よ」は、「殉教者の心理」への興味の時期があつたと記し、さらに「この頃」では「キリストは今日のわたしには行路の人」ではないという告白に至る。このように回想する芥川の執着は、〈キリシタンもの〉という「種」を育む「畝」の可能性、「畝」に通う水脈の可能性と無縁ではあるまい。その水脈の広がりを読むことは、日本近代文学とキリスト教という問題の系譜をたどることになるのみならず、〈キリシタンもの〉の現在性(同時代性)を読むことにもなるはずである。種々の水脈が交流する場としての〈キリシタンもの〉という視点から、「神々の微笑」(「新小説」大正11年1月)を中心に検討してみたい。

キリスト教と近代文学——キリシタン大名・大友宗麟と近代日本キリスト教文学の可能性——

細川 正義

「聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さをもて、はつきりと二分されている」。周知の太宰治『HUMANLUST』(一九三七)の一文である。この太宰の鮮やかな指摘の通り、「聖書」そしてキリスト教は特に近代文学の展開において常に大きな課題を投げかけている。早くは北村透谷が『内部生命論』(一八九三)において「内部の生命あらずして、人性人情なるものあらんや」と問いを発し、文学の根源への問いがキリスト教的問いかけを抜きがたく必要としていることを提示したが、その問いかけは現在にも通底している。その過程で芥川龍之介が『神神の微笑』(一九二二)で問い、その課題の重要性を改めて主張した遠藤周作が『神々と神と』(一九四七)で問うた日本の精神風土とキリスト教受容の問題はその根幹にかかわる問題として常に問われている。一方、この近代日本におけるキリスト教受容の問題と切り離せないのが、徳川政権によるキリシタンへの徹底した弾圧政策である。近代日本の出発がこの不幸な歴史をトラウマとして背負って出発したことが精神風土の問題、そして土着化の問題の上に更に重く絡み付いている。

一五四九年に鹿児島に上陸して日本にキリスト教の種を蒔いたザビエルの布教は二年の間に約七百人をキリシタンに改宗させたとも言われている。九州を中心にしたキリスト教の種は特にキリシタン大名が誕生することで急速に信徒を増やしていった。その中心の一人に豊後だけでなく九州の広範囲に勢力を及ぼした大友宗麟がいる。その宗麟たちの及ぼしたキリスト教布教への影響が江戸時代の禁教政策で完全に断たれてしまった。現代になって遠藤周作が著した『王の挽歌』(一九九〇、一九九二)はその大友宗麟とその時代のキリシタンのあり様を髣髴させることでその不幸な断絶の時間を超えて繋ぐことで新たなキリスト教と文学への可能性を提示したともいえる。

近代日本の精神風土においてキリスト教を文学の中で融合し芸術に昇華した試みに芥川龍之介の切支丹物作品群は重要な足跡を残し、その試みも遠藤周作のキリスト教文学がその必然性をもって継承しているとも言える。

今回は歴史資料に基づいた立場から大友宗麟とキリスト教について考察し、その大友宗麟を視座に近代文学とキリスト教の可能性を追求した遠藤周作の文学を、芥川龍之介の切支丹物への試みとの対置の中でより鮮明に問いかけていくという体制でシンポジウムを展開する。

《劇》的な人生―遠藤周作と「切支丹もの」（『王の挽歌』など）

川島 秀一

いま問題の関心を、作者遠藤をして「第二期の総決算」と言わしめた『侍』（1980・4）から始めることになるのだが、遠藤が「第一期」の総決算であったであろう『沈黙』（1966・3）の達成以後、自らに「日本人につかめるイエス像を具体的に書くという課題」を課したことは周知のところである。（小説家）として、（キリスト者）として、遠藤のほぼ全重量がこの一文にかかってあることもまた容易に想像がつく。「日本人につかめる」イエスとは何者か。それは、（日本人）のなかにいかに受容されるのか。『侍』における、遠藤の作品史上初めて登場する「日本人自体におけるイエスの受容」（佐藤泰正）という問題であり、それはまた、『沈黙』以降、その（イエス）を、「泥沼」だと言った（日本人）の原質と風土の根源から問い返すことを意味していた。

『侍』においても作品を色濃く染め上げることになるのだが、同じく歴史小説にも語られる人間の（悲しみ）とは何か。（弱者）とは何者か。あるいは、日々繰り返りひろげられる（生活）ならぬ、（人生）の意味とは何か。『王の挽歌』（1990・2）をはじめ、ほぼ歴史小説群に共通して描き出される《面従腹背》の人生。私たち人間が強いられてある日常の原質と根源。遠藤作品を一貫する（弱者）もまた、その《普遍》において、『侍』から大きく転移し、問い返され、それぞれが時代に翻弄される（歴史群像）として、生き生きと自在に活写されるように見える。後の『深い河』に言う、近代小説が描き続けてきたのだという（心理の世界）ならぬ《魂》の問題（『深い河』に関する遠藤の発言）――《魂》の劇としての（人生）の問いである。

（切支丹時代の我々の国が、まともに西洋とぶつかった時代である）とは、同様に作者遠藤の関心の在り所を示す言葉である。近代小説への懐疑をうちにひそめつつ、問いはずでに単に（日本人）ならぬ、（人間）の普遍の問いとして、その「まともに」ぶつかったという時代のなかに彼らがキリスト教とどのように衝突し、自らのうちに受容し、魂の劇を、また普遍の劇をどのように生きるようになるのか。これら歴史小説（「切支丹もの」）の可能性を含めて、これら問題のいくばくかを（大友宗麟）の人間像を通して考えてみたい。

切支丹文学という領域とその臨界——「神神の微笑」と「神々と神と」を視点に——

宮坂 覺

芥川龍之介は、一八九二（明治25）年三月一日、築地居留の隣接地に生まれ、両親の大厄のため捨て子の形式を採られ斜向かいの教会の扉の前に捨てられたという。そして、一九二七（昭和2）年七月二四日未明、イエス伝である「西方の人」を絶筆とし最期まで読み続けていた聖書を枕元に自裁した。（三五年五カ月）の時間を結ぶ（教会の扉）と（イエス伝）（聖書）は、誰しもが興味をそそる。さらに、その時間や興味を包括する形で、切支丹ものが存在する。その遺産と継いだ一人に遠藤周作がいる。彼らのあり様を問うことは近代日本文学を抉る有用な視点である。

芥川は、一九一六（大正5）年、「芋粥」（9）「半巾」（10）で文壇デビューした直後に切支丹もの第一作「煙草と悪魔」（11）を世に出している。発表誌は、二作のメジャー誌『新小説』『中央公論』とは違って、仲間内の同人誌『新思潮』であるが、興味深い。だからこそ、成熟していないまでも、裡に蟠っていたテーマを書いたともいえる。さらに、翌年刊行した第二短編集は『煙草と悪魔』である。

「煙草と悪魔」のテーマを継承し鮮明に現したものに、「神神の微笑」などがある。これらに通呈しているのは、〈不機嫌〉である。《悪魔》を〈不快〉にさせたもの、オルガンテイノを〈憂鬱〉にさせたものは何か。そこに、日本のエートスの本源がある。西洋的教養を通して〈西〉を知った芥川は、〈東〉に潜む強靱な力を早くから裡に捉え、生涯を通してこの問いに面峙し続けた。切支丹ものは、芥川の引き裂かれた教養と身体から生み出された所産といえることができる。

遠藤周作は、「沈黙」（1966〈昭和41〉）発表当初、しばしば「神神の微笑」との関わりを指摘され戸惑った。その真偽は問わない。が、少なくとも、溯ること一九年、二四歳の彼は「神々と神と」（1947〈昭和22〉）を発表し、〈神〉の国と〈神神〉の国を問う。〈神々〉でなく〈神神〉であろうか。

M・ウェバーやE・トレルチなどが展開するように近代精神がプロテスタンチズムの鬼子であるならば、近代精神、芸術と宗教は宿命的な対立構造を孕む。日本の近代化はそれら両者を疑いもなく有効な思潮として混在して受け入れた。一八八〇年後半のナショナリズム台頭の時期も潜り抜け〈西〉精神の核としてキリスト教は、近代化の精神的ツールとして機能した。一九一〇年代前半の南蛮切支丹ブームにおいて、キリスト教文化への相対的視点が顕在化した。その中の芥川龍之介切支丹ものである。半世紀後の遠藤周作の切支丹ものである。近代精神・宗教（キリスト教）・芸術という三者鼎立的構図の中に切支丹ものを発見する。その意味を問うことは、新しい地平を拓くものとなる。

大友宗麟とキリスト教

八木 直樹

豊後（大分）を本拠とした戦国大名大友宗麟（義鎮）は、大友氏に最盛期をもたらした人物として、またキリシタン大名として著名である。大友宗麟とキリスト教との出会いは古く、1549年鹿児島に來日したフランシスコ・ザビエルとは、父義鑑にかわり大友家当主となった次の年である1551年に対面している。その後、大友宗麟は、豊後を訪れた多くのイエズス会宣教師たちと出会い、彼らが布教を行う最大の保護者として、数々の便宜を計らってはいるが、宗麟自身の受洗は1578年のことであった。この時、受洗した宗麟の洗礼名ドン・フランシスコは、敬愛するザビエルの名からとったものと推測されている。このこと自体が宗麟個人のキリスト教への強い理解と傾倒を示していると考えられる。しかし、受洗するまでの長い期間は、宗麟個人の思い入れとは裏腹に、彼に仕える多くの家臣たちの動向など、領国を治める戦国大名としての宗麟の立場も考慮しなければならない。

こうしたキリシタン大名としての大友宗麟、あるいは宗麟の受洗をめぐる過程については、小説の題材などに取り上げられることも多い。しかし、それはあくまでも文学の世界における叙述であり、実際の史実とは異なる点もある。

キリシタン大名大友宗麟に関する国内の一次史料（いわゆる古文書）は、ほとんど残されてはいない。しかし、宗麟と交流があったイエズス会宣教師が残した史料は、国内の史料からはいくつか行うことができる。大友宗麟についての多くの情報を現在に伝えている。こうした宣教師たちが残した史料を、可能な限りの史料批判を行いながら、本報告では、確実な史料に基づいたキリシタン大名大友宗麟とはどのように描くことができるのか、について報告したい。

A会場

豊玉毗賣神話における「塞海坂返入」の意味

國學院大學大学院生 室屋 幸恵

『古事記』における迹々藝能命毗火遠理命・鵜葺草葺不合命の日向三代は、初代天皇神武に繋がる神統譜を継ぐ者であり、また上巻と中巻を繋ぐ物語でもある。本発表ではその日向三代のうち、火遠理命の子である鵜葺草葺不合命の出生神話を考察の対象とし、特に豊玉毗賣の「塞海坂返入」という表現について考察することを主眼とする。

火遠理命と火照命の「易佐知」に端を発した火遠理命の海宮訪問譚は、火遠理命が海神から「鉤」や助言を受けることを通して神統譜に「水」の権能をもたらすことが主眼であり、豊玉毗賣との婚姻は、系譜という点から権能を獲得するための要素であると考えられる。

従来この豊玉毗賣の出産神話については、メルシナ型の異類婚姻譚との比較研究や、「見るなの禁」のモチーフから多く考察がなされ、「塞海坂」については陸海の交通の途絶の由来譚であると説明がなされてきた。しかし、「塞海坂」の後も豊玉毗賣の妹玉依毗賣は火遠理命の元に向かうことができたことを鑑みると、「塞海坂」とは単に陸海の交通の途絶を語るものではなく、むしろ火遠理命と豊玉毗賣との関係の断絶を意味すると考えられる。

火遠理命と豊玉毗賣の婚姻が神統譜における「水」の権能の獲得であるならば、彼が「見るなの禁」を破って婚姻を破綻させたことは重大な失態である。しかし、豊玉毗賣は「耻」をもたらした火遠理命に「戀心」を抱くのであり、両者は「塞海坂」という破

綻を見せながらも、豊玉毗賣の「戀心」によって関係を保つのである。

このことから、本発表では、①天孫である火遠理命と海神の娘である豊玉毗賣の婚姻が「塞海坂」ことで一旦は破綻を見せながらも、豊玉毗賣の「戀心」によって関係の修復が試みられること、②そのことよって火遠理命の子の鵜葺草葺不合命も海神との繋がりが保証されること、③「塞海坂」という表現が断絶ではなく、次代に系譜を繋ぐ重要な要素であること、以上を結論としたい。

平安前期における挽歌の位相

万葉古代学研究所 小倉 久美子

挽歌とは、人の死に関わる歌のことであり、『万葉集』の部立の名称にもなっている。ただし、挽歌の語義が棺を挽くときにうたう歌であるのに対し、挽歌の部立に収められている歌はさまざまな場面で詠まれたものである。左注に「挽歌の類」と記されるゆえんである。

通常、歌人がうたを作るとき、部立を意識することはない。挽歌を詠もうとする意識のもとで詠作されたものは日本挽歌などごく少数に限られ、そのほとんどは結果として挽歌の部立に所収されているにすぎない。こうした『万葉集』における挽歌の実相を踏まえたうえで、本報告では平安前期における挽歌の位置づけを試みたい。

『文華秀麗集』には「侍中翁主挽歌詞」という嵯峨天皇の御製詩と、それに唱和した漢詩が二篇ある。先学によると、『文選』の挽歌詩は三篇で完結するのが本来の形であり、第一篇は出棺、第二篇は葬送、第三篇は埋葬の場面をよむというように、三篇は時間

的経過を追う一連のものとして構成される。それを踏まえて侍中翁主への挽歌詞をみても、嵯峨が出棺から埋葬地までの場面をよみ、それに唱和した二篇が埋葬地に到着する場面と、埋葬の場面とをよんでいることから、『文選』挽歌詩にみられる三篇が時系列で展開する形式と類似する表現方法であることがわかる。すなわち、嵯峨朝における挽歌詞には、挽歌という言葉だけではなく、その表現にまで中国の挽歌詩の影響をみることができるのである。

さらに『日本後紀』逸文には、嵯峨が良岑安世の薨去に対して「挽歌二篇」をつくったとある。嵯峨朝の文化的特徴である唐風化の担い手のひとりであった臣下の死を悲しみつくられたのがこの挽歌であろう。

ところで、嵯峨は喪葬儀礼が整備されていく過程においても重要な存在である。なぜなら、嵯峨による遺詔は平安中期以降、享受されていったからである。嵯峨による挽歌の実作と遺詔は、喪の文化に何をもたらしたのか、追究していきたい。

ノートルダム清心女子大学黒川文庫蔵 伝明融筆『源氏不審抄出』について

ノートルダム清心女子大学大学院生 伊永 好見

『源氏物語不審抄出』は、連歌師宗祇が作成した注釈書である。内容は、空蟬・若紫・花宴・濤標・蓬生・関屋・少女・玉鬘・螢・常夏・行幸・横笛・鈴虫を除く四十一巻から不審とされる箇所を一二〇項目余り挙げ、『河海抄』『花鳥余情』等の先行する説を批判的に検討しつつ、注釈を施している。

諸本は、管見では九本あるが、いずれも成立年は記されておらず、富小路俊道が、最後の旅に立出する直前の宗祇から譲り受けた旨の奥書がある。しかし、清心本はこの奥書がなく、代わりに「此抄出宗祇法師註也 桑門明融」となっている。また、先に挙げた巻の他に、花宴巻があるほか、注釈の内容が俊通本と異なる

箇所や、清心本のみ脱落が見られるなど、独自の本文を有している。

本書の内容については、山岸徳平氏、伊井春樹氏等によって、宗祇他注との比較を交えて論じられており、また、黒川本については『源氏不審抄出』(ノートルダム清心女子大学古典叢書、福武書店、一九八二年)の白井たつ子氏の解題があるが、まだ本格的な諸本の校合は行われておらず、諸本の関係、異同の詳細などは、明らかにしているとは言い難い。そこで、本発表では、『不審抄出』の俊通本、黒川本と、明応四年の跋文をもつ藤原正在著『一葉抄』に引かれる宗祇説との比較を行い、清心本の諸本の中の位置付けを考察したい。これにより、従来、奥書等から、宗祇晩年の作ともいわれてきた『不審抄出』の成立過程が推測できるのではないかと考えている。

宗祇自身の著作で、『源氏物語』全体にわたる注釈書は本書のみである。本書の成立過程を明らかにすることは、三条西家源氏学の基盤ともなった宗祇の注釈の形成過程を考察することにもつながるのである。

牧水と万葉集

同志社女子大学研究生 田中 教子

近代短歌は、西洋文学の撰取によって立ち上がりながら、和歌の源流である万葉集を尊重することで、あらたな継承と変革に挑んできた。若山牧水においても、万葉からの影響が言われてきたが、牧水自身による自注や歌論には、特に万葉集に言及した説がほとんどみられないため、享受の実態について、これまで明らかにされるのがほとんどなかった。そこで、今回は、牧水の万葉集享受についてあらためて考察したいと思う。まず、今回の考察にあたっては、歌集『海の声』『別離』に見える「海死にぬ」の表現を中心に検討してゆくこととしたい。

はじめに、先行文献として、山根巴「若山牧水と万葉集」(一九

八一年二月号「解釈」を検討する。

つぎに、(一)は、本題に入る前の前置きとして、牧水の読んだ万葉集と、その読み方について検討したうえで、牧水の作歌にたいする考え方を明確にする。

つぎに(二)では、牧水の

真昼時青海死にぬ巖かげにちさき貝あり妻をあさり行く

海の声・別離

海死せりいづくともなき遠き音の空にうごきて更けし春の日

海の声・別離

などの歌にみえる「海死す」の表現が、万葉集卷十六の旋頭歌からの影響と考えられことをあきらかにし、同時に、寄物陳思の「求食」の歌の型に影響を受けていることを検証する。

(三)では、『海の声』と『別離』における配列の違いについて考察を加える。

(四)では、「死にゆくか地」「風死す」など表現について検討を加え、そこに万葉集とはまた違う国木田独歩からの影響の存在を確認し、牧水における自然主義のありかたと、「恋死に」という和歌の伝統的スタイルの継承を青年期の牧水の作品に見出し得ることを確認し、結びとしたい。

B会場

大江健三郎『水死』論

——作家的課題への新しい挑戦

日本女子大学文学部研究員 鈴木 恵美

大江健三郎が発時から自らに課した作家的課題は、三つある。一つは、「監禁状態」に置かれた人間の自己欺瞞による狂死や自殺を逃れる方法を見つける。二つめは、『こころ』の「先生」が殉死を装って自殺するに至る生き方の否定と救済。三つめは、日本人の殉死や戦争時の死を美化することへの批判だ。

「監禁状態」については従来、特定の時代の閉塞感や個人の状

況と考えられ、選択可能な意識行動とされる(自己欺瞞)とは区別されてきた。しかし大江の初期に影響を与えたサルトルの捉え方は、人間が自身の意識の外へ出ることができないがゆえに、他者や世界を真に理解することは不可能であり、その結果、人間は必ず何らかの(自己欺瞞)に生きる存在であると捉えている。

「監禁状態」とは、人間が意識構造ゆえに(自己欺瞞)に生きるをえないことであるならば、大江の課題は、特定の時代状況や個人ではなく、日本人全体の精神性の根本的改革による救済だ。

最新作『水死』(講談社、二〇〇九・一一)評は、殉死や『こころ』の「先生」の自殺、及び「時代の精神」に関する論争と現在の政治状況を結びつけたものが大半である。しかし、大江が「最後の小説」を書くと言いつつ続けるのは、生きている限り全力で作家的課題に取り組む覚悟の表明であって、自ら課した困難な課題に、作家生命を賭す姿勢にこそ、『水死』の真の価値がある。

本発表では、まず、『水死』における小説内の『こころ』の引用と原作を比較して恣意的な解釈が施された理由を考察し、「先生」の自殺が自己欺瞞によることを明確にする。次に、主人公古義人の自己欺瞞を検証し、息子アカリの存在による「かれ」の死の回避可能性を読み取り、小説内の『こころ』と『水死』の主題は、共に自己欺瞞を扱うが、異質な点があることを指摘する。さらに、主題と作家的課題との一貫性を見出して、『水死』は大江健三郎が作家的課題に新しい方法で挑戦した野心作と結論付ける。

魚名「しいら【鱈】」について

駒澤大学教授 萩原 義雄

魚のなかで知っているようで知らない外洋回遊魚「しいら」について日本語の文献資料である古辞書・語彙科往来・本草書・国語辞典類を基軸に考察してみた。その結果として、次の点を明らかにする。

(1) 最も古い用例が、新羅社宮司大伴泰広(大伴広公)編

『温故知新書』(文明十六(一四八四)年に成立)であったこと。

(2) 室町時代の辞書中にこの「鱮」の語を所載する情報既知グループと未所載にする情報未知グループに二分されること。

既知：『温故知新書』。饅頭屋本『節用集』。易林本『節用集』。『日葡辞書』。

未知：『下學集』。広本『節用集』。『倭玉篇』類。『運歩色葉集』。『撮裏集』。『継忘集』。『佚名古辞書』。天草版『落葉集』。

(3) 江戸語彙科往來の初期資料は、こぞって「鱮」の語を所載する。

(4) 江戸中期から後期語彙科往來には、「鱮」の語とは別に塩乾魚の「九万疋・九万曳」の語を収載する。

(5) 江戸時代の『本朝食鑑』。『和漢三才圖會』。『魚鑑』などによる研究が進むことで、「鱮」の生態習性が広く知られるようになった。

(6) 「鱮漬」なる漁法が北陸から九州肥前肥後域に広く浸透していた。

(7) 漢名「勒魚」が櫛涯武井周著作『魚鑑』に見え、明治時代の大槻文彦編『言海』にまで所載されていたが、現代の国語辞書では「鬼頭魚」に変容している。漢名の依拠した資料名を明らかにしていない。

(8) 「勒魚」の語は、明時珍著『本草綱目』を繙く限り、別種の魚名である。

(9) 「鬼頭魚」の語は、中国名の「鬼頭刀」に聯繫する「しいら」の名である。ただし、江戸時代の『三音四聲字貫』に所載されるが別魚である可能性も否めない。

(10) 現代人は、「しいら」の語を知って、此の語を別名で表現することはない。また、美味なる塩乾魚の「くまびき」の語をここで学んでおきたい。

已上のことを今回明らかにしてみた。

大分大学旦野原キャンパスへのアクセス

- 大分まで【空路】
 羽田空港—大分空港（1時間30分） 大阪空港（伊丹）—大分空港（55分）
 名古屋（中部）—大分空港（1時間10分） 大分空港—大分市内：連絡バス（60分）
- 大分まで【鉄道】
 小倉駅—大分駅（1時間30分）
- 大学（旦野原キャンパス）まで【鉄道】
 大分駅—JR豊肥本線（15分）—大分大学前駅—徒歩（5分）—大分大学
- 大学（旦野原キャンパス）まで【バス】（土日は本数が少ないので鉄道をおすすめします）
 □バス乗車場（大分バス）「大分駅前」もしくは「トキハデパート前①のりば」
 「大南団地・高江ニュータウン」「大分大学」行き——（30分）——「大分大学正門」もしくは「大分大学（構内）」下車
 「戸次」「臼杵」「竹田」「佐伯」行き——（30分）——「大分大学入口」下車

旦野原キャンパス建物配置図（会場は④）

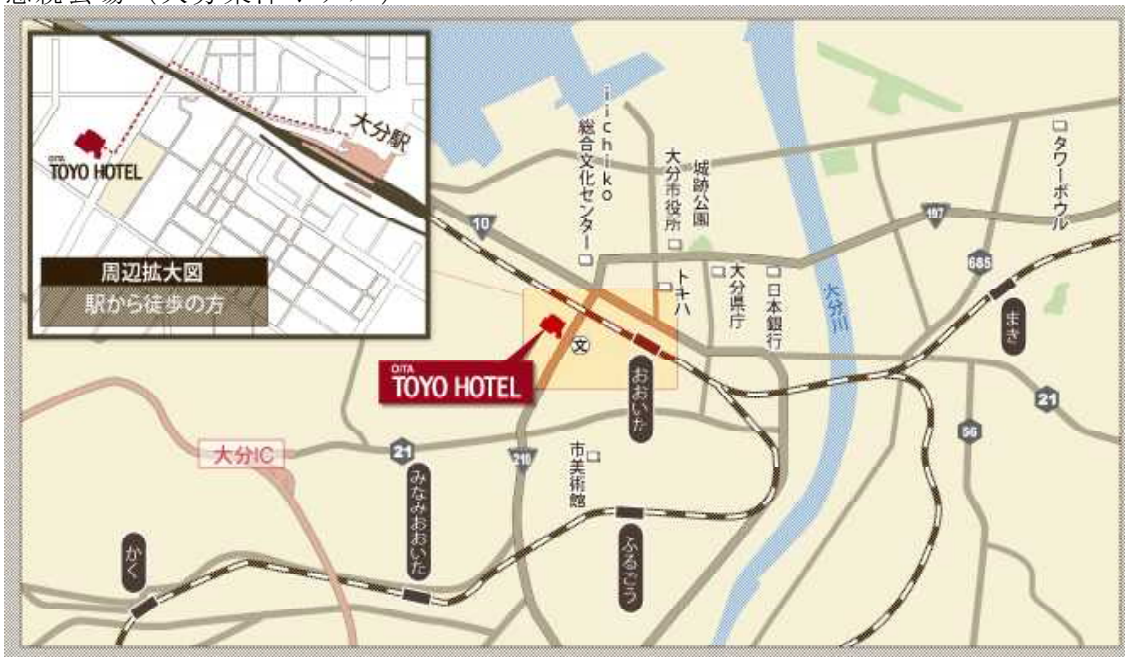


教育福祉科学部建物配置図



- 常任委員会 会場
 地域交流室（管理人文棟第一会議室側）の端
- 常任委員・委員会 会場
 第一会議室（管理人文棟側）の左
- 公開シンポジウム 会場
 100号教室（管理人文棟と自然科学棟の間）
- A会場 200号教室（教室棟2階）
- B会場 300号教室（教室棟3階）

懇親会場（大分東洋ホテル）



■大分駅からのアクセス
 徒歩 約10分 タクシー 約5分

□徒歩でお越しの場合
 日豊本線 JR 大分駅北口の改札を出て左方向へ進みます。
 ドトールコーヒーさん横の路地を線路沿いに進み、2つ目の踏切を渡ります。（左手前方にホテルが見えて参ります。）
 国道210号線まで出ましたら、その先左方向です。

大分市内の主な宿泊施設

- 大分全日空ホテルオアシスタワー 大分市高砂町 2-48 097-533-4411 大分駅より徒歩 8分
- 大分東洋ホテル 大分市田室町 9-20 097-545-1040 大分駅より徒歩 10分
- 大分第一ホテル 大分市府内町 1-1-1 097-536-1388 大分駅より徒歩 3分
- 東横イン大分駅前 大分市金池町 2-2-5 097-534-1045 大分駅より徒歩 5分
- 大分センチュリーホテル 大分市府内町 1-4-28 097-536-2777 大分駅より徒歩 5分

